

建物火災  
事例  
31

防火構造の住宅火災に出動し、消火作業に当たっていた。当初、放水していた団員と筒先担当を交代するため、管鎗を受け取り保持した際、夜間のため周囲が暗く機関員との連携がうまく取れず、圧力が急に上がったため体勢を崩し転倒した。



結果

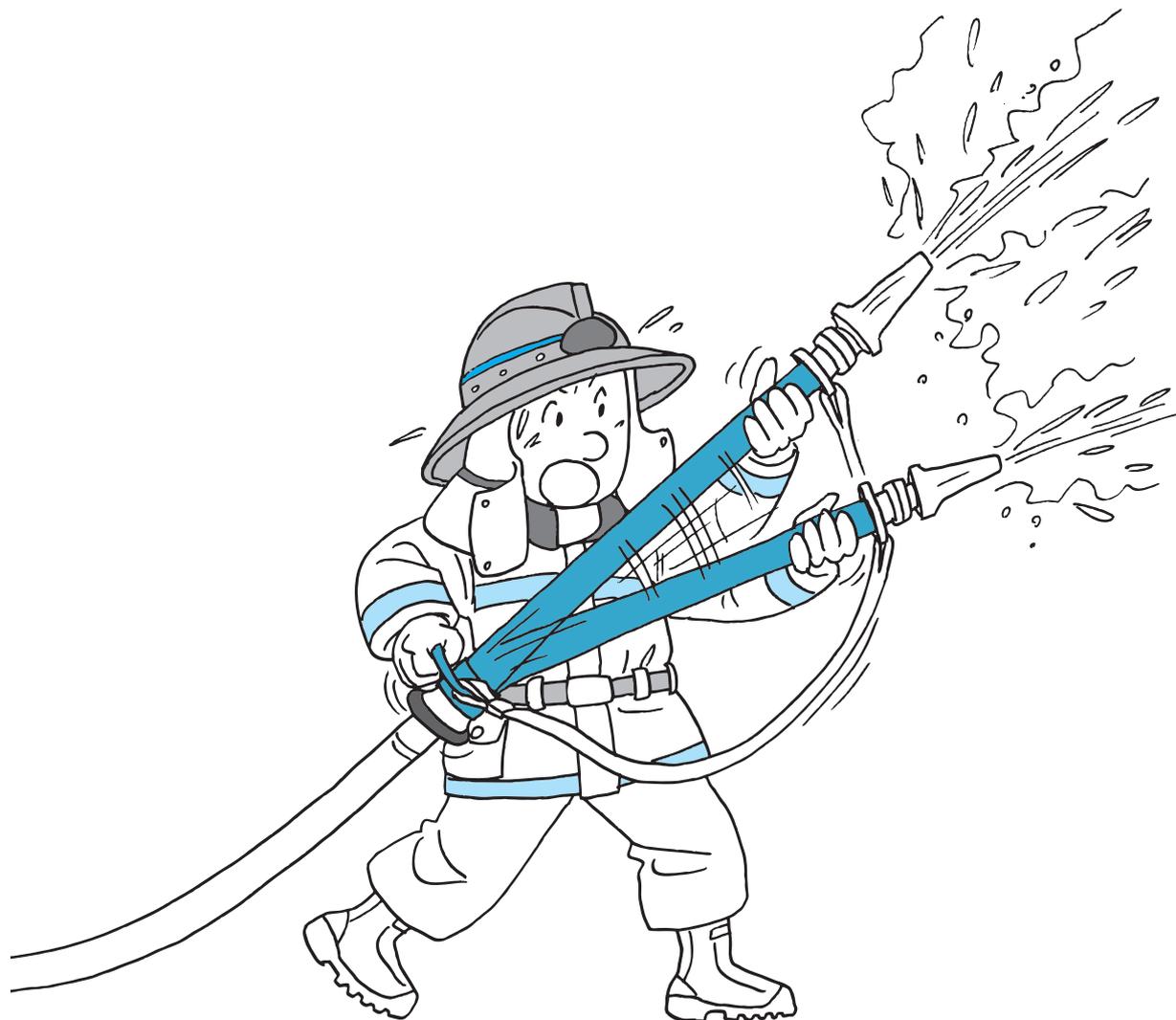
負傷者なし

▶▶▶ 対策

筒先担当を交代する場合は筒先をシャットにして交代する。  
シャットできないタイプの筒先の場合は、補助員を配置し2人以上で筒先を確保して交代する。  
機関員は計器を常に監視し圧力の上下動に注意する。

建物  
火災  
事例  
32

火災現場に出動し、筒先担当員として1人で消火活動をしていた際、水圧が高くなり筒先保持ができなくなりそうになった。



**結果** 負傷なし

▶▶▶ 対策

日頃から実践的な訓練を行い、ホース圧力等について体得させる。  
筒先担当は原則として2人以上で行う。  
機関員の実技訓練を行う。

建物火災

林野火災

その他火災

風水害

捜索救助

演習訓練

ポンプ操作

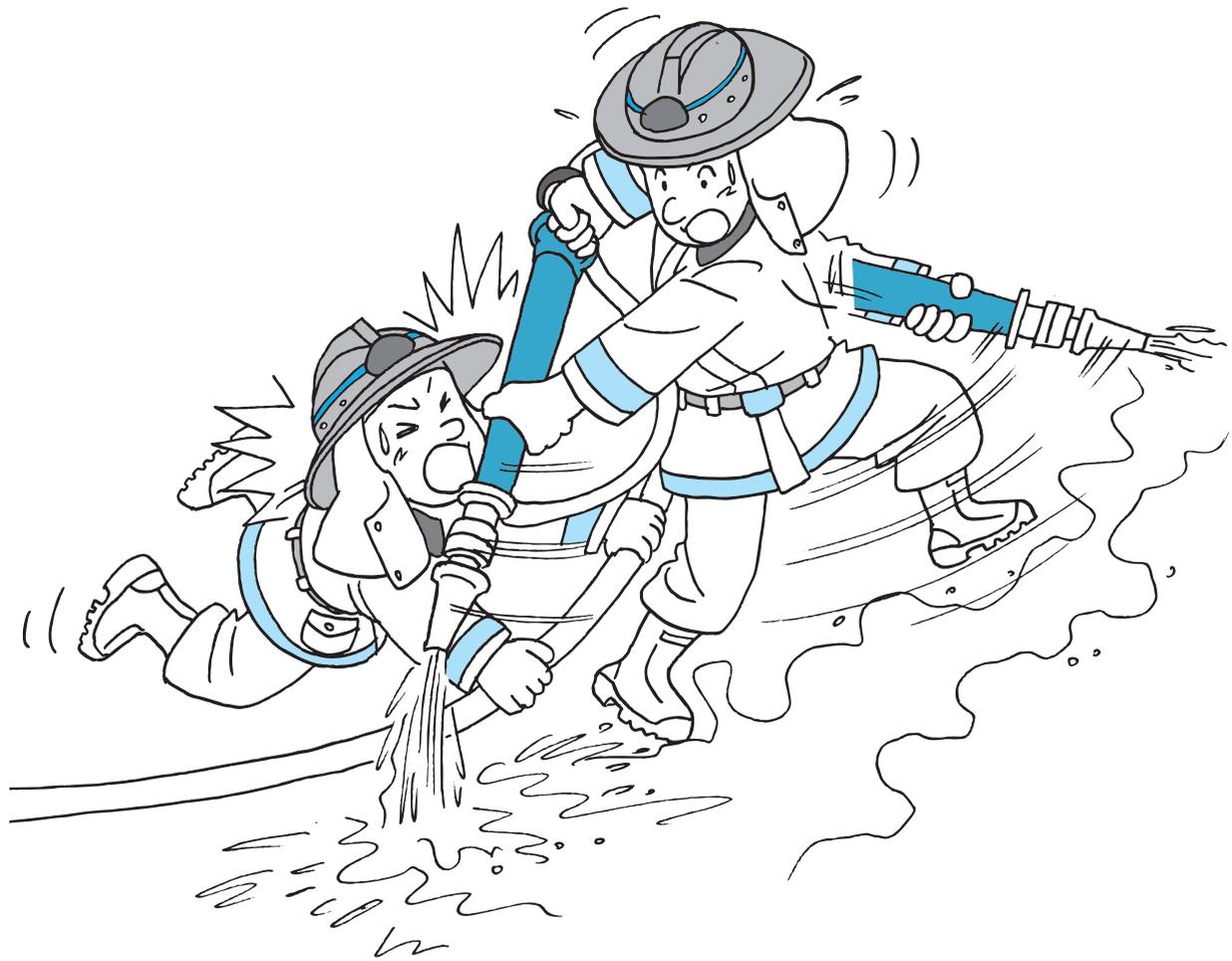
警戒・広報

往復経路

点検整備  
その他

建物火災  
事例  
33

建物火災に出動し、筒先補助員として筒先担当員の後方でホースを保持していた際、放水中の分岐具操作による急激な圧力の変化のため、ホースに大きな負荷がかかり、大きく振られ、補助員が顔面口元を強打した。



結果

口腔内上唇打撲  
(上歯 1、下歯 1 欠損)

▶▶▶ 対策

分岐具を操作する場合は急激な開放操作を避け、少しずつ開放操作を行う。

日頃からの訓練に取り入れ指導を徹底する。

建物  
火災  
事例  
34

建物火災に出動し、本ポンプから中継ポンプへホース延長後、中継ポンプから火点へホースを延長し、筒先担当員として部署した際、機関員との連絡が徹底されておらず送水圧力が高かったため、耐え切れずに筒先を持ったまま転倒した。

**結果** 手背部挫創

消防無線、トランシーバー、伝令等による情報伝達を確実に行う。

筒先員はホース延長が終了したら、不意の送水があることを想定して、必ずノズルを「閉」の状態にしておく。

放水姿勢は、反動に備えて管鎗を腰に密着させ、確実に保持する。また、地物等を利用して急激な送水に備える。

ノズルの急激な「開・閉」作業は行わない。

機関員は、送水する場合、予備送水を行うなど急激な送水作業は行わない。放水口のcockの急激な操作を行わない。

▶▶▶ 対策

建物  
火災  
事例  
35

建物火災に出動し、分団長として水利部署している他の分団のポンプ車から中継を受けるよう団員に指示し、火災現場及び周囲の状況を確認した後、消防車両に戻ろうとした際、周囲が暗く蓋のない用水路（水無し）の向こう側に民家があったため道路がつながっていると勘違いして直進し転倒した。

**結果** 左手親指骨折

火点から消防車両に引き返すときは、延長されたホースに沿って、ホースのねじれ、破損等を確認しながら引き返す。

夜間は、照明器具で足元を確認して行動する。

▶▶▶ 対策

建物火災

林野火災

その他火災

風水害

捜索救助

演習訓練

ポンプ操作

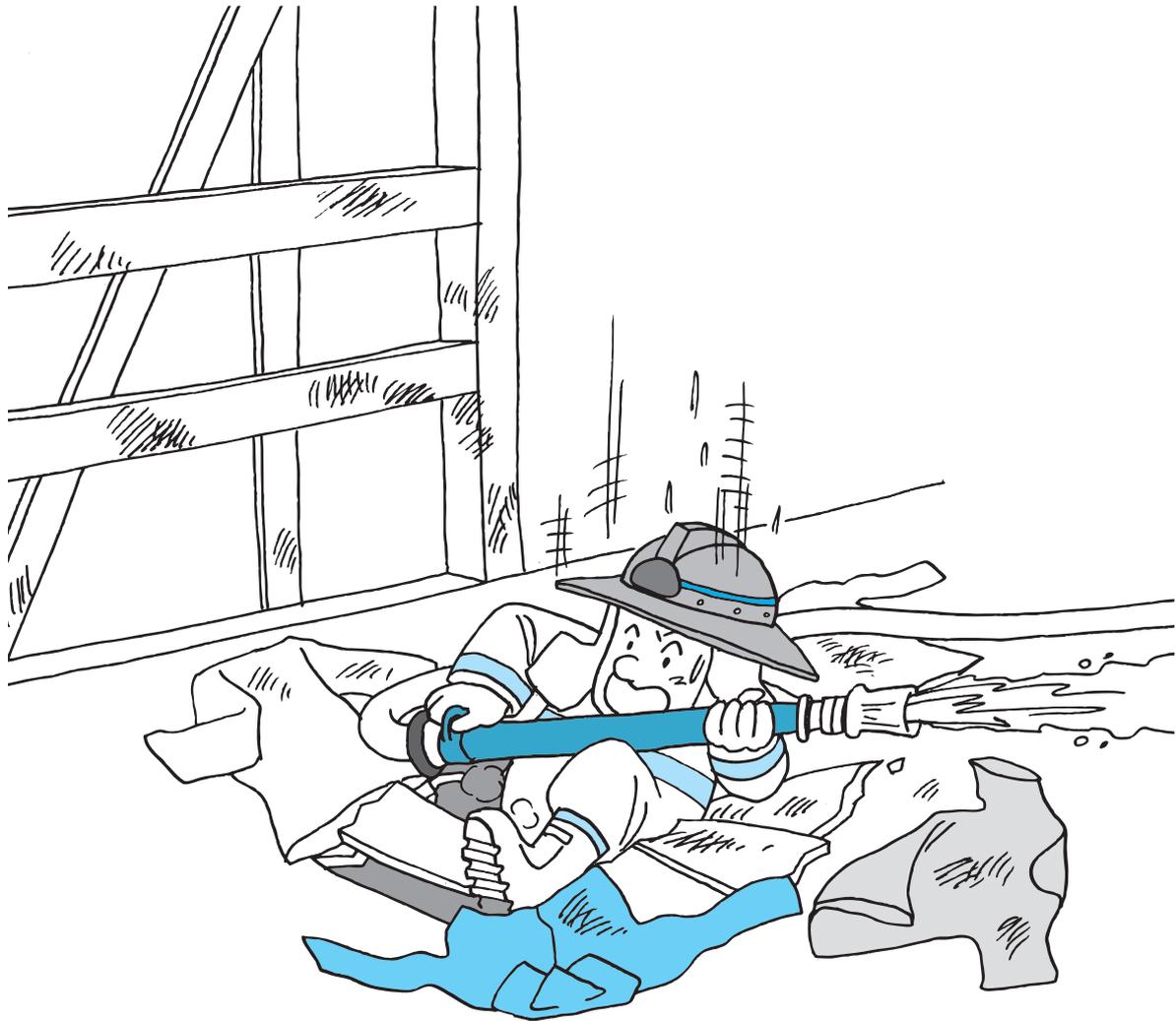
警戒・広報

往復経路

その他  
点検整備

建物  
火災  
事例  
36

木造2階建て住宅火災に出動し、鎮圧後の残火処理をしていた際、階段を上り建物の2階部分に足を踏み入れた際、夜間のため暗く、衣類等が散乱していたため焼失部分がわからず転落した。



結果

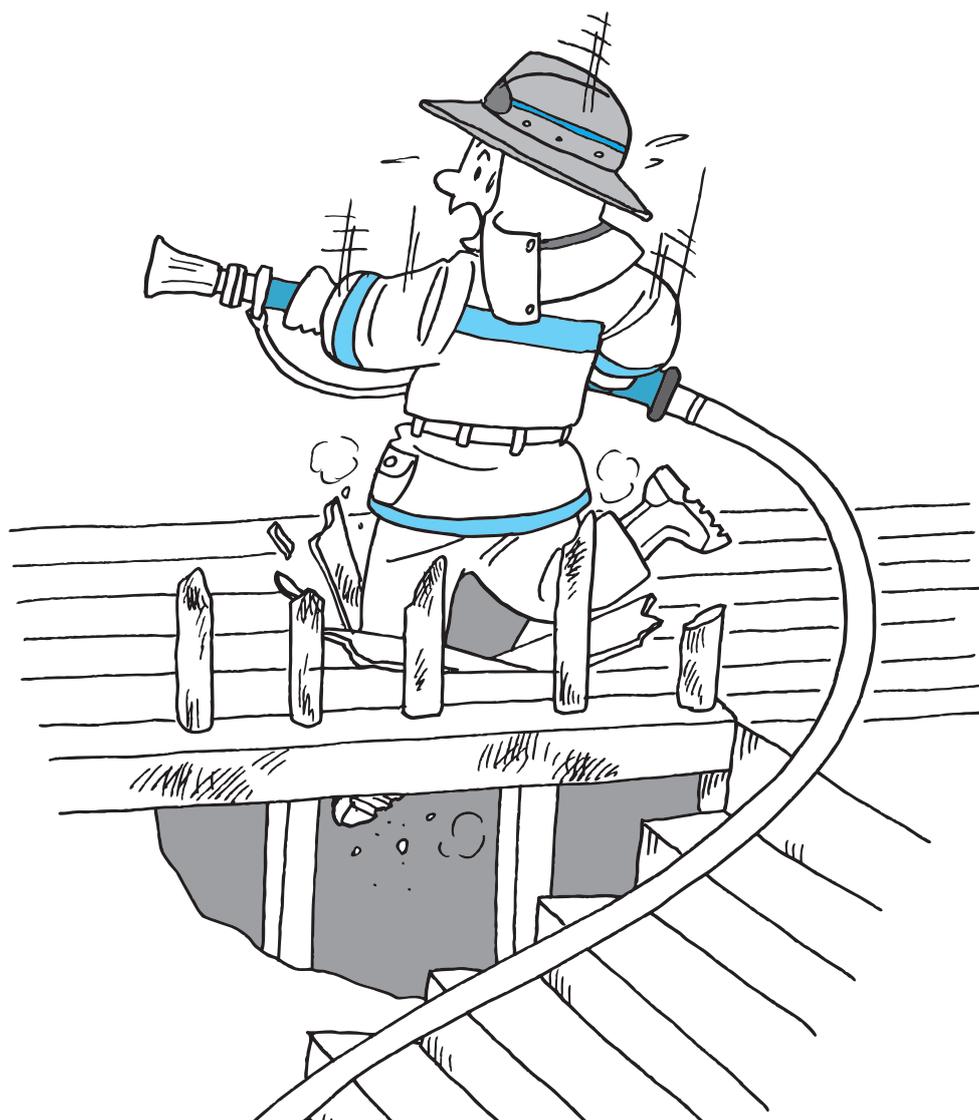
足の捻挫、腰部打撲

▶▶▶ 対策

夜間の残火処理等に当たっては、照明器具を活用し、建物の崩落に注意するとともに足元のたわみなどを確認しながら壁づたいに行動する。

建物  
火災  
事例  
37

木造2階建て建物火災に出動し、鎮圧後、残火を確認するため2階の廊下に入ったところ、床板の燃焼が激しく強度がなかったため、片足が廊下の床板をつきぬけて1階に転落しそうになった。



**結果** 負傷者なし

▶▶▶ 対策

2階へ進入するときは、トビ口等で梁や床の強度を確認して行動する。安全が確認できないときは、廊下や室内の中央部を避け、壁面に沿って進入する。

建物火災

林野火災

その他火災

風水害

捜索救助

演習訓練

ポンプ操作

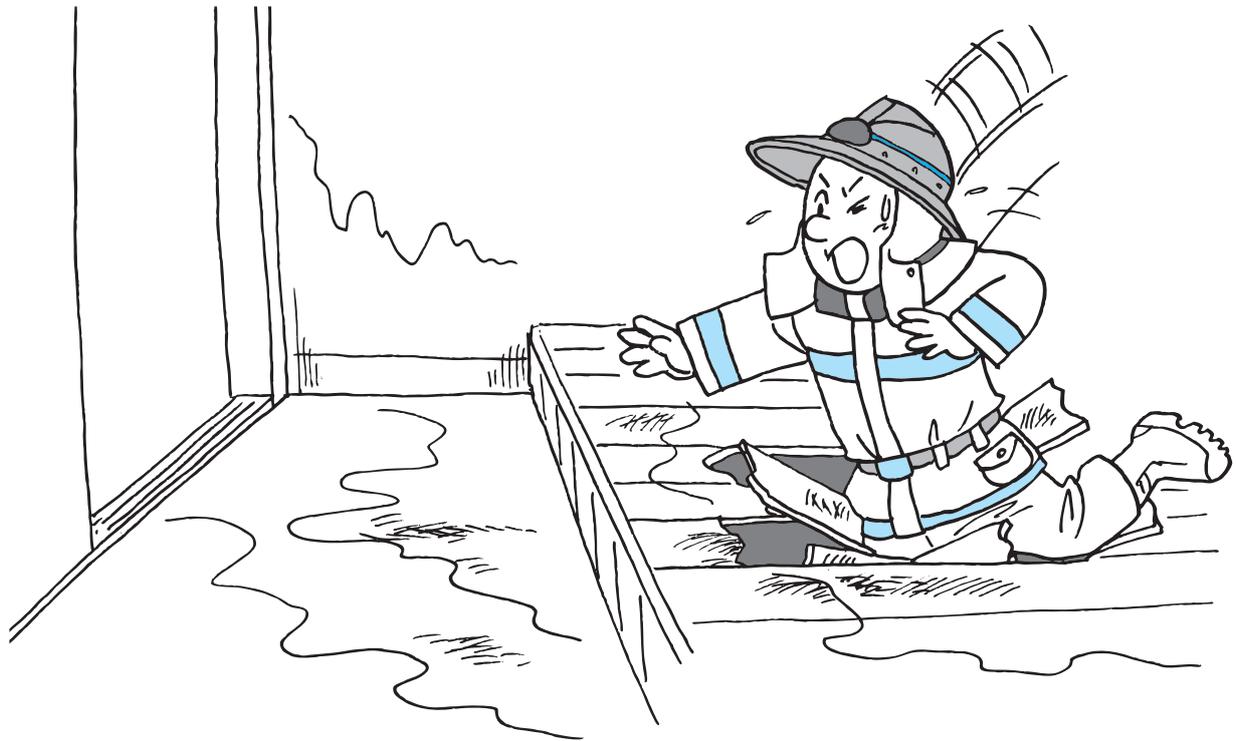
警戒・広報

往復経路

点検整備  
その他

**建物  
火災  
事例  
38**

夜間に発生した木造住宅の火災に出動し、鎮圧後、屋内で残火処理を行った。残火処理終了後、屋外に出ようとした際、夜間で暗かったため、床が抜けている箇所に気づかず、足を踏み外して床下へ落下した。


**結果**
**腰部打撲、右足関節捻挫**
**対策**

夜間の火災現場で活動する際には、照明器具を用いて周囲の安全確認を確実にしながら行動する。

鎮圧後は緊張感から解放され「気のゆるみ」が出るため、最後まで集中力を維持する。

建物  
火災  
事例  
39

木造1階建ての住宅火災に出動し、出火建物の床上で、筒先補助員として筒先担当員とともに、場所を確保するため移動していた際、周囲が暗く足元の状況が把握できていなかったため、足を踏み込んだ際に床が崩落し足を踏み外した。



結果

負傷なし

建物火災の場合は、内部の照明が消えていることが多いので照明器具を活用して安全な足場を確保する。

筒先員と筒先補助員の連携（声かけ：「障害物がある」「穴が開いている」等）を図る。

落下物で足場の確認ができない場合は、落下物を排除しながら活動する。

▶▶▶ 対策

建物火災

林野火災

その他火災

風水害

捜索救助

演習訓練

ポンプ操作

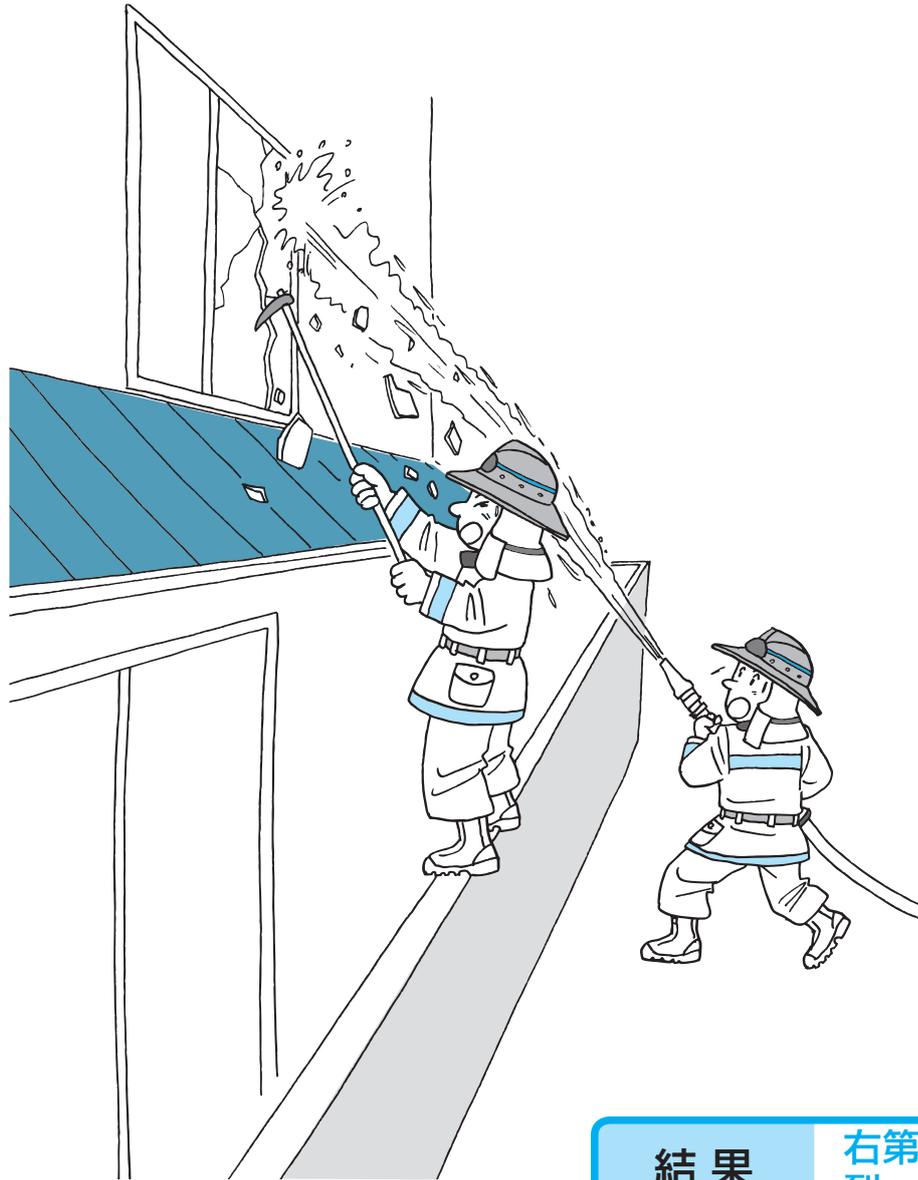
警戒・広報

往復経路

その他  
点検整備

建物火災  
事例  
40

木造2階建て住宅火災に出動し、筒先担当員の補助として有効注水を実施するため、ブロック塀の上でトビロを使用して2階の窓ガラスを破壊していた際、逃げ場がなかったため飛散したガラス片で手を負傷した。



結果

右第3、4指伸筋腱断裂、右第5指挫創

▶▶▶ 対策

高所でガラス窓の破壊作業を行う場合は積載はしごを活用し、はしごを破壊箇所の真下ではなく、横の位置に架け、ガラス窓の上部から徐々に破壊する。

はしごを架ける位置がなくブロック塀等の上から破壊する場合も、横に位置しガラス窓の上部から徐々に破壊する。

建物  
火災  
事例  
41

木造2階建て住宅の火災に出動し、分団長として炎上中の建物内部に放水させるため、ガラスが割れたアルミサッシをはずしていた際、放水の水で濡れていたため手が滑り、割れたガラスで軍手の上から手が切れた。



**結果** 左人差指切創

すでに割れている窓ガラスから放水する場合は、必要でない限りアルミサッシをはずすのではなく、破壊器具を使用して放水する箇所を確保する。割れている窓ガラスは、なるべく内側に落とし込み、ガラス片は完全に除去する。

不用意な開口部の破壊は、給気現象により、火勢や濃煙、熱気等が急変する場合があるので、十分注意する。

▶▶▶ 対策

建物火災

林野火災

その他火災

風水害

捜索救助

演習訓練

ポンプ操作

警戒・広報

往復経路

点検整備  
その他

建物  
火災  
事例  
42

木造2階建て住宅の火災現場に出動し消火活動に従事した。鎮圧後、消火状況を確認するため消防職員とともに建物の2階部分に進入した際、火災による焼け落ち及び放水のため建物全体が焼け濡れていたために天板、梁等が崩れ落ちてきた。



結果

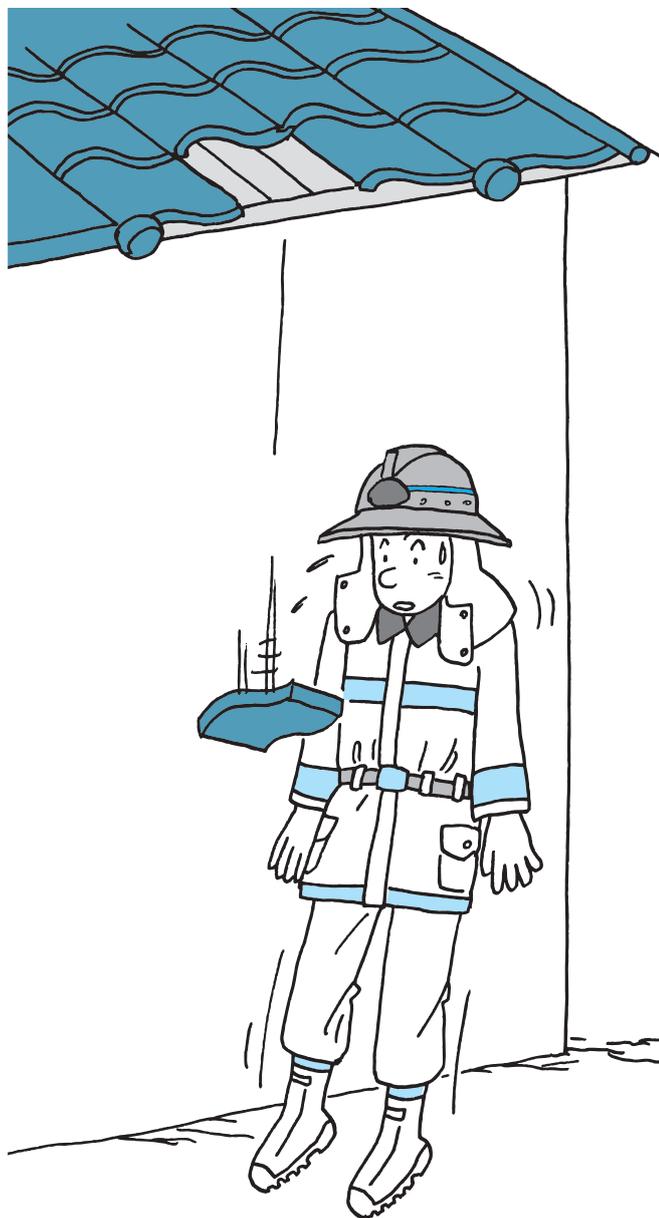
負傷なし

## 対策

建物内部に進入する場合には、ヘルメット、防火衣等を着用し、必要に応じて照明器具を用い、天井、壁等の周囲の安全を確認し、危険性を十分に予測して行動する。

建物  
火災  
事例  
43

木造2階建て住宅の火災に出動し、鎮火後、罹災建物を確認するため周囲を歩いていた際、一枚の瓦が落下し、直撃しそうになった。



**結果** 負傷なし

建物の状況に注意し、落下の危険性がある物は、放水等であらかじめ落下させておく。

出火建物周辺は、常に落下物等の危険性があるため、真下での活動や通行は避ける。

現場活動を行う場合は、必ず、上方の安全確認を行う。

▶▶▶ 対策

建物火災

林野火災

その他火災

風水害

捜索救助

演習訓練

ポンプ操作

警戒・広報

往復経路

点検整備  
その他